

2026（令和8）年度

相模原看護専門学校 一般入学試験【第一期】

国語

（試験時間 50 分 配点 100 点）

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答する途中で、ページの落丁・乱丁や印刷不鮮明の箇所および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験官に知らせてください。
3. HB の黒鉛筆を使用し、訂正する場合は消しゴムで完全に消してからマークしてください。
4. 解答用紙に氏名を記入し、解答は全て解答欄を正しくマークしてください。
5. 試験終了の合図と同時に解答を止め、鉛筆を置いてください。
6. 解答用紙は試験官の指示に従って提出してください。

問題一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間は、放っておけば、対人関係ごとに別々の分人になっていく。しかし、その反動として、「個人」という整数的な単位に統合しようとする力も働く。現実的には、私たちは、その二つのレイヤー（層）を往復しながら生きることになるだろう。

分人化の抑制は、何も無理矢理に行われるばかりではない。

たとえば、1キリスト教で修道院に入ったり、仏教で出家したりするのは、社会的な関係を断って、神との分人、仏道修行をする分人以外の分人を処分するためだ。

女子修道院に入っている年頃の少女が、外にこっそり恋人を作ってしまったら、当然、そのカレとの分人が肥大して、神と向き合う分人を圧迫してしまう。従って、外部との関係を断たなければならない。出家した仏教徒が、かつての家族や恋人との関係を懐かしむ類の煩惱は、家族や恋人との分人を自分の中から抹消することの難しさを A 的に示している。

また、ストックホルム症候群という不思議な現象についても、分人の観点から理解可能かもしれない。

銀行強盗などに襲われて、人質に取られた人々は、当然犯人を憎み、嫌い、一刻も早く助かりたいと思うはずだが、長い時間を一緒に過ごすうちに、なぜか犯人に共感し、協力し始めたりすることがある。それが、実際の事件に基づいてストックホルム症候群と呼ばれている精神の状態だ。この場合、閉鎖環境の中で犯人との分人が急激に肥大化し、家族や友人との日常的な分人を圧迫してしまっていると見ることが出来る。また、突入のために説得を続けている警察とは、分人化が起きていないので、その言葉を信用できない、ということもあるだろう。いずれにせよ、非常に特 a シュな状況下で生じた、一種の歪な分人だと言えそう。

一人の人間が、様々な分人の集合体だということは、子供の成長を考える上でも重要だ。

ヒトの成長過程で、最もコミュニケーションの機会が多いのは、基本的に両親、あるいはそれに相当する存在だ。生まれてきて、最初に分人化するのは親に対してであり、物心つく前から、つまりはキャラを変えたり、仮面をかぶったりと

いう意識以前から、²人間は対人関係ごとに異なる人格を示すようになる。母親に抱かれていると、おとなしい静かな子が、見知らぬベビーシッターに預けられると、何時間でも泣き続けたりする。それに「ペルソナ」という心理学の用語を用いたりすると、おかしな話になる。親は親で、保育園に迎えに行った我が子が、保育士に見せるのはまったく違った笑顔になるのを目にする、無性に嬉しくなる。それを見て、「子供が二重人格になった！」「ああ、こんな幼い子にまで、人間のウラオモテを見るとは！」などと **B** 観する人はいないだろう。

人間は、かなり大きくなるまで、親との分人をベースに対人関係を増やしていく。従って、親の存在が大きいのは間違いない。「子は親の鏡」とはよく言うが、これは、子供の親との分人の意味とも解釈できる。子供の頃に親から虐待された人間は、その分人をいつまでも抱え込んでしまうことになる。

親に続いて、兄弟姉妹や親類、近隣住民との分人が生じ、更に保育園や幼稚園、小学校に上がるにつれて、友達や教師との分人も形成されてゆく。幼稚園に通い出した **b** 1 端、どこで覚えてきたの？ というような汚い言葉を使い出したとするなら、それは、友達同士の分人化が **C** 常に起きている証拠だ。

結局のところ、子供の生育環境を考えるとというのは、その子にとって、どのような分人の構成が理想的なのかを考えることなのだろう。育ちの良い、恵まれた人間にばかり囲まれているのはいいとは必ずしも言えない。社会そのものが、もっと複雑な、³ **種** **種** 様な人間によって構成されているからだ。

また、ネットの中には、例えば、ヒトラーを賛美するようなサイトも存在しているが、ナイーヴなまま、その思想にかぶれた分人が肥大化していった、他の分人を圧迫するようなことになっては大きな問題だ。実際、欧米で銃乱射事件が起きた時には、しばしば、そうしたサイトの影響が指 **c** **テキ** されている。

いずれにせよ、分人化は起きる。かつては、親に見せる顔と学校で教師に見せる顔、それに友達という時の顔が、それぞれに違、うということが、否定的に語られていた。そのクセに、友達感覚で教師に話しかけたりすると、叱りつけられたりしたのだから、まったくちぐはぐな話である。

しかし、親の前と、教師の前と、子供同士で顔が違うというのは、子供なりに、まったく異なる人間と、どうすればコミュニケーションが可能かを模索した結果だ。それは決して、否定すべきことではない。

もしそれを咎めるなら、子供は、またしても不毛な「本当の自分」探しに駆り立てられることになり、現実の人間関係を、偽りの、表面的なものとして軽視しなければならなくなるだろう。

誰を好きになるよりも、一番難しいのは、ひよつとすると自分自身なのかもしれない。なぜなら、自分のことは、あまりによく知りすぎているから。よほどのナルシストでない限り、人は、そんなに自分を全面的に肯定できないだろう。

私が、小説の中で、分人という概念を初めて登場させたのは、前述の通り『ドーン』だったが、その前作『決壊』では、もう一步のところまで迫っていた。『決壊』の主人公は、「本当の自分」などというものを信じていないが故に、空^dキヨ感に苛^{さい}まれて
いる。

彼は、こんなことを口にしてている。

「自分か世界か、——どちらかを愛する気持ちがあれば、人間は生きていける。だけど俺は、そのどちらに対しても、あの頃、愛情を失いかけてた。」

世の中のことが大嫌いで、社会に絶望していても、自分が好きであれば、生きていける。逆に、自分のことを好きになれなくても、世の中が楽しければ、生きていけるのかもしれない。問題は、そのどちらかが我慢ならなくなることだ。

4 自分に対して否定的になっている人に、まず自分を愛しなさい、自分を大事にしなさいと言つても、あまり意味がないのではないか？ 嫌いというのは、不合理な感情だ。単に好きになれと言われてみても、ハイそうですか、とはならないだろう。

しかし、自分という人間の全体を **D** 然と考えるのを止めて、分人単位で考えてみるとどうだろうか？

自分のことが嫌いな人がいれば、自分の分人を一つずつ、考えてみよう。

「Aさんと会っているときの自分は、快活で、面白い冗談なんかも自然と口に出来て、満更でもない。」

「Bさんと一緒にいるときの自分は、いつも真 **ケン**だ。それはそれで充実感がある。」

「Cさんといるときの自分は、なんか、肩が凝って、イマイチだ。」

「Dさんと、……」

人は、なかなか、自分の全部が好きだとは言えない。しかし、誰それといるときの自分（分人）は好きだとは、意外と言えるので

はないだろうか？ 逆に、別の誰それという時の自分は嫌いだとも。そうして、もし、好きな分人が一つでも二つでもあれば、そこを足場に生きていけばいい。

5 それは、生きた人間でなくてもかまわない。私はボードレールの詩を読んだり、6 森鷗外の小説を読んだりしている時の自分は嫌いじゃなかった。人生について、深く考えられたし、美しい言葉に導かれて、自分がより広い世界と繋がっているように感じられた。そこが、自分を肯定するための入口だった。

分人は、他者との相互作用で生じる。ナルシシズムが気持ち悪いのは、他者を一切必要とせずに、自分に酔っているところである。そうになると、周囲は、まあ、じゃあ、好きにすれば、という気持ちになる。しかし、誰かという時の分人が好き、という考え方は、必ず一度、他者を経由している。自分を愛するためには、他者の存在が不可欠だという、その7 逆説こそが、分人主義の自己肯定の最も重要な点である。

人間が抱えきれない分人の数は限られている。学校で孤独だとしても、何も級友全員から好かれなければならない理由はない。友達が三人しかいないと思うか、好きな分人が三つもあると思うかは考え次第だ。逆に十人も二十人も友達がいて、そのすべてに最適に分人化するのも、けっこう大変だろう。

そうして好きな分人が一つずつ増えていくなら、私たちは、その分、自分に肯定的になれる。否定したい自己があったとしても、自分の全体を自殺というかたちで消滅させることを考えずに済むはずだ。

(平野啓一郎『私とは何か―「個人」から「分人」へ』より)

問一 傍線 a ～ e のカタカナと同じ漢字を使うカタカナを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は a 〓 ・ b 〓 ・ c 〓 ・ d 〓 ・ e 〓 。

a
特シユ

④ シユ勝な心がけだ
③ 簡単にシユ肯できない
② 読書をシユ味とする
① 保シユ的な考え方だ

b
ト端

④ ト料がはげ落ちる
③ 彼の意トした通りに進む
② 結局はト労に終わった
① 少子化の一トをたどる

c
指テキ

④ 皿の水テキをぬぐう
③ 内部の不正をテキ発する
② 好テキ手に巡り会う
① 蒸気船の汽テキが響く

d
空キヨ

④ 退職して隠キヨしている
③ 彼はキヨ動不審だ
② キヨ偽の供述をする
① 海外にキヨ点を増やす

e
真ケン

④ ケン法に違反する
③ ケン設的な意見を求める
② 海外に使節を派ケンする
① ケン道の試合に臨む

問二 傍線1「キリスト教で修道院に入ったり、仏教で出家したりする」に対する説明として適切ではないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 6。

- ① 信仰心を揺るぎないものにするための修行の一環として、宗教上強制的に行われるものである。
- ② 家族や恋人など、世の中との結びつきや未練を断ち切って、修行に専念するための行為である。
- ③ 神と向き合う分人だけを自分の中に残すために、他の分人を消し去ることを目的としている。
- ④ 捨て去るのが難しい世俗的な煩惱と無理にでも戦い苦しみつつも、あえて選択する行いである。

問三 傍線2「人間は対人関係ごとに異なる人格を示すようになる」に対する筆者の考えとして最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 7。

- ① その場に適した人格を演じるうちに、本当の自分を見失ってしまう恐れがある。
- ② 相手から求められている自分を演じようと努めるのは、人として自然なことだ。
- ③ 誰と一緒にいるかによって、一人の人間が異なる性格になるのは当たり前のことだ。
- ④ 人間関係が広がれば様々な分人ができるが、本当の自分がしっかりあれば問題ない。

問四 傍線3「□種□様」の□に共通して入る語を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 8。

- ① 万
- ② 凡
- ③ 多
- ④ 千

問五

空欄 A へ D に入る語をそれぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は A へ 9

B へ 10 ・ C へ 11 ・ D へ 12

- ① 漠
- ② 悲
- ③ 端
- ④ 正

問六

傍線 4 「自分に対して否定的になっている人に、まず自分を愛しなさい、自分を大事にしなさいと言っても、あまり意味がないのではないか？」について筆者はどのように述べているか。最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 13

- ① 自分のことはよく知っているだけに好きになるのは難しくても、好きな自分を見出すことはできる。
- ② 自分をなかなか好きになれなくても、周囲の友人を好きになれば一緒にいる自分も好きになれる。
- ③ 人前で演じている自分には否定的でも、好きなことをしている時の自然な自分は悪くないと思える。
- ④ 無理に自分を好きになろうとするのではなく、様々な自分について知り、全て受け入れることが大切だ。

問七

傍線 5 「それ」が指す内容を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 14

- ① 未知の自分に気づかせてくれる友人
- ② 美しい内面世界へ誘ってくれるもの
- ③ 自分を好きになる端緒となる他者
- ④ つらい時に心を癒してくれる何か

問八 傍線6「森鷗外」の作品として適切ではないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 「高瀬舟」
- ② 「三四郎」
- ③ 「山椒大夫」
- ④ 「最後の一句」

問九 傍線7「逆説」に相当するものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① メタファー
- ② アナロジー
- ③ オノマトペ
- ④ パラドックス

問十 本文の内容に合致するものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① ストックホルム症候群は、閉鎖的環境で強い恐怖に支配され、逆らうことができない症状をいう。
- ② 子供を見れば親が分かるとうよくいわれるのは、幼い頃は親の影響が強く、分人化が起きないためだ。
- ③ 他者と関わりを持たずただ自分に酔っているだけの人は、本当に自分を愛しているとはいえない。
- ④ 対人関係を広げることで分人の数はいくらでも増やしていくことができ、それが人の魅力を作る。

問題二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「病院を調べておいたほうがいいよ」¹麻友美が思いきつたように口を開く。注¹ちづるは麻友美を見た。「もし途中で具合が悪くなつて、どうしようもなくなることも考えて、伊豆までのルートで駆けこめる病院、できるだけ大きな病院をマークしておいて」

ああ、麻友美にもわかったんだ、とちづるは思った。これが、伊都子にとってどうしてもやらなければいけない何かで、同時に、私と麻友美にとつてもやり遂げなくてはならない何かなのだと、私とおんなじように麻友美もわかったんだ。

「それで、いつにするの」ちづるは訊いた。

「早いほうがいいんだけど、でも、みんなも予定があるでしょ」

「明日は？」麻友美がちづると伊都子を交互に見る。

明日は個展のオープニングパーティの日だった。四時にはケータリングサービスがやってきて準備がはじまり、パーティは五時半に開始だ。そこでちづるは挨拶をすることになっていた。その日はとことん飲もう、と泰彦は上機嫌で言っていて、二次会の場所まで予約してある。明日のためのドレスは、二週間前に買った。アクセサリーと靴も合わせて。

ちづるは、泰彦のギャラリーに並んだ絵をぼんやりと思ひ浮かべた。男の顔、女の顔、風景。最初は、夫を見返したかった。私はひとりでごんなことだつてできるのだと言つてやりたかった。自分で自分を軽んじているような状況を抜け出したかった。絵を描いて、それでどうしたいのかという泰彦の問いに答えることができなかつた。タイムセールで商品をつかみとるような絵を描くんだと、よく意味もわからないままそれだけを思つて描いた。描いて描いて、とにかく描いた。^aキンカトレーニングをしているみたいに描いた。充実していた。それでもわからなかつた。絵を描いて、それでどうしたいのか、わからなかつた。夫の恋人を見にいふた。自分で望む通り^A。惨めだつた。それなのにまだ、私は一歩も踏み出せずにいるのだ。

「明日にしよう。つていうか、深夜だからあさつてになるのか」
ちづるは、重々しくそう告げる自分の声を聞いた。

絵を描いて、私は強くなりたかつたんだ。耳に届いた自分の声を²反芻しながら、ようやくちづるは理解した。強くなりたかつ

たんだ、私は。

母親を嫌いなのだと言って泣いた伊都子を思い出す。今、ピクニックの相談をするかのごとく晴れやかに海行きの話をする伊都子は、ちづるの願ったその強さを人知れず獲得しているかのように思えた。

「**3**あのころを思い出すね」ふと伊都子が言った。

「あのころって」

「伊豆高原で、バンドやろうって計画したじゃない。なんかのテレビ見て」

「歌作ったね。衣装のデザインもして」

「大まじめにね」

「みんなであうたいながら買いたいね。スーパーが遠くてさ」

伊都子の母の病気を考えると、そんな話をするのは **B** が、止まらなかった。伊都子と麻友美につられるようにして、勝手に思い出される光景をそのまま口にした。大騒ぎして料理をした。三人で林のなかを歩いた。スケッチブックに **b** 空の衣装をいくつも描いた。インタビューごっこに **c** キョウじて笑い転げた。ビールを買ってきておそろおそろ飲んだ。なんでもできると思っていた。ほしいと願ったものは、ほしいと願ったそばから手に入ると信じていた。

「ねえ、何かやりたいと思ったとしたら、それって、思った時点からもうはじまっているんだよね」

空のコップを盆に戻しながら、伊都子がぼそりと言う。

「なあに、それ、どういうこと？」麻友美が訊く。

「こんな人になりたいって思ったとするでしょ、思った時点から、もう、なりたい人になりはじめているんじゃないかって、私、思ったのよね」伊都子は言って、盆を手にキッチンに向かう。

「意味、わかんない」麻友美は言いながら、伊都子がセロファンだけはがして放っておいたビスケットの箱を手にとり、「あらこれ、**d** ショウ味期限切れてる」と眉間にしわを寄せた。

「平気よ、それくらい」ちづるは箱を麻友美の手から奪い、蓋を開けてひとつ口に放りこんだ。甘くてしょっぱい味が広がった。

厚木ICまでの東名高速も、そこからの小田原厚木道路も空いていた。一三五号をまつすぐ下り、熱海を通過する。左手に広がる海は暗く闇に沈み、巨大な穴ぼこのように見えた。暗い車内にはちいさく音楽がかかっている。気が散るからか、ラジオも音楽もかけずに麻友美はハンドルを握っていたのだが、音を切ってしまうとたんに車内を沈黙が包み、その重苦しさに耐えかねたらしく、CDをデッキに入れていた。スウェディッシュロックだと麻友美が説明したが、助手席のちづるには4カナディア
ンロックだろうがチャイニーズロックだろうが関係なかった。

後部座席で、注² 芙巳子は伊都子にもたれるようにして眠っている。車に乗せるときは芙巳子は目覚めていて、「また私を引っぱりまわすつもり？ 私はあの絵のことにはもう関係がないんです」と意味のわからないことを、見た目のe **スイ**弱とは裏腹に強い口調で言っつけちづるをC。違うのよ、ママ、海に行くのよ、海よ、と、なだめるように伊都子がくりかえし、ようやく静かになった。高速に乗るころには芙巳子は眠っていた。苦しげに眉間にしわを寄せ、薄く口を開いて眠る芙巳子を、ちづるは幾度も盗み見た。

「このぶんだと五時前には着けるかな」運転席で麻友美がささやくように言う。

「日の出が見れるといいね」伊都子の、どこか華やいだ声が聞こえる。

ともかくも、芙巳子を病院から連れ出すことには成功したのである。ちづるは個展の二次会から抜け出し、病院の時間外入口で伊都子と落ち合った。ドレスにコートを羽織ったままの格好だった。ちづると伊都子は、ナースステーションから看護師の姿が消えるのを待ち、無人になった隙に車椅子に乗った芙巳子を連れ出したのだった。芙巳子を見てちづるはD。ほんの少し前に会ったときは別人のように変わって見えたからである。痩せこけていた顔は腫れあがり、なのにまったく生気が感じられない。とろんと開いた目の半分は、黄色い膜がかかっていた。髪の毛を気にした伊都子がかぶせたのか、やけに色合いの鮮やかなつば広帽をかぶっているのが異様に見えた。そんな芙巳子が、囁かれた声をはりあげるようにして意味不明のことを叫んだときは、⁵ 胸がつぶれるような思いがした。麻友美の車を見つけて慎重に近づく。芙巳子を車椅子から降ろし、点滴をいったんポールから外して麻友美が掲げ持ち、ポールは短くして車の後ろに入れ、ガムテープで固定した。ママ、つらい？ だいじょうぶ？ そう訊く伊都子の声は、子どものように幼かった。海に行くの？ 海にいけるの？ そう訊き返す芙巳子の声は、それよりさら

に幼かった。

眠る前に痛み止めと睡眠剤をのんだという芙巳子が眠ると、ちづるは安心した。ともかく、芙巳子を起こさないよう、苦痛を感じさせないよう、伊豆にたどり着くしかないのだ。

伊都子の誘導通りに麻友美は運転をし、海辺にたどり着いたのは四時を少しばかり過ぎてからだだった。伊都子は弓ヶ浜ゆみはままでいくつもりだったらしいが、帰りの一三五号が確実に混むと麻友美が言い、結局それよりずっと手前、今井浜いまいはまで朝を待つことにしたのだった。

海沿いの道に車を停め、麻友美がエンジンを切ると、音がすっと消えた。芙巳子のたてる薄いいびきがやけに大きく響く。麻友美も伊都子も何もしゃべらなかつた。ちづるも黙って、数えるように芙巳子のいびきを聞いた。

水平線が、やがてゆつくりと赤みを帯びてくる。⁶ 橙色の、燃えるような太陽の切れ端が海の向こうからじりじりと見えてくる。伊都子は黙って車を降り、車椅子を出した。麻友美もちづるも車を降りて、伊都子が芙巳子を車から降ろすのを手伝う。車椅子に座った芙巳子は薄く目を開け、

「イツちゃん、海」と、ちいさく言った。

「そうよ、海よ、ママ、ぐるぐるうずまきのパンもミルクコーヒーもあとで買ってくる」

「海」芙巳子はささやくように言った。

車椅子でいけるぎりぎりまで伊都子はいって、しきりに母親に話しかけている。背後から点滴用のポールを持ってついていったちづるは、そっとその場を離れた。麻友美と並んで、母と娘の姿を見る。どんどん大きくなる太陽が、二人の輪郭を驚くほど鮮やかな色で光らせる。何かとても神々しいものを見るように、ちづるは目を細めて海と向き合う二人を見る。

深い充実をおぼえていた。何をしたんだらう私、と思う。何もしていない。助手席に座っていただけだ。なのに胸に広がる充実、幾枚も幾枚も絵を描いていたときより、ずっと深く、濃いように思えた。

「やったわね」隣で麻友美がちいさくつぶやき、

「うん、やった」そう答えながら、麻友美も同じことを思っているらしいとちづるは知る。

ゆるやかな風に芙巳子のかぶったつば広帽が舞い上がる。芙巳子も伊都子も、それに構わず海を見つめている。青く染まりは

はじめた空に舞う、色鮮やかな帽子をちづるは見上げる。7 その光景は、自分の描いたどんな絵よりも完璧に完成しているように見えた。

(角田光代『銀の夜』より)

注1 ちづる……夫の不倫に悩んでいる。

注2 芙巳子……伊都子の母。癌を患い余命が少ない。

問一 傍線 a ～ e のカタカナと同じ漢字を使うカタカナを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は a ㉑ 18 ・ b ㉒ 19 ・ c ㉓ 20 ・ d ㉔ 21 ・ e ㉕ 22 。

a
キンカ
18

④ キン糸卵をつくる
③ 鉄キンのビルが並ぶ
② キン賀新年と書く
① 事態はキン迫している

b
カ空
19

④ コロナ力が収束する
③ 力失による事故
② けが人を担力で運ぶ
① 競争が力烈をきわめる

c
キョウじて
20

④ 大盛キョウに終わる
③ キョウ愁をさそう
② キョウ味深い本だ
① 話題を提キョウする

d
ショウ味
21

④ ショウ細な説明を受ける
③ 戸籍ショウ本を取り寄せる
② 感ショウ的な気分にあたる
① ショウ状を授与する

e
スイ弱
22

④ スイ納係を務める
③ 栄枯盛スイ
② 山紫スイ明
① スイ敵を重ねる

問二 傍線1「麻友美が思いきったように口を開く」とあるが、この時の麻友美の気持ちとして、最も適切なものを一つ選び、

記号をマークしなさい。 解答番号は 23。

- ① 二人だけに任せておいたら、取返しをつかないことになると思う気持ち。
- ② 水を差す言葉と分かっている、勇気を出して口にしようと思う気持ち。
- ③ 前もって忠告しないでいれば、自分はきつと後悔すると確信する気持ち。
- ④ たとえ大変なことになるとしても、ひと肌脱ごうと覚悟を決める気持ち。

問三 傍線2「反芻しながら」のここでの意味として、最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。 解答番号は 24。

- ① 冷静に分析しながら
- ② 他人のもののように聞きながら
- ③ 改めてかみしめながら
- ④ 自分の耳を疑いながら

問四 傍線3「あのころを思い出すね」と言った伊都子の心情として、適切ではないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答

番号は 。

- ① 母の病状を憂いながらも、懐かしい思い出に心が華やぐ気持ち。
- ② 希望と自信にあふれていた自分たちを、まぶしく思い返す気持ち。
- ③ 協力してくれる友人を気づかい、明るい話題に切り替える気持ち。
- ④ 友人と久しぶりに力を合わせられることを、嬉しく思う気持ち。

問五

空欄

く

に入る語をそれぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。

解答番号は

||

・

|| ・ || ・ || 。

- ① たじろがせた
- ② 動揺していた
- ③ 打ちひしがれた
- ④ 不謹慎に思えた

問六 傍線4「カナディアンロックだろうがチャイニーズロックだろうが関係なかった」とあるが、気にならない程些細なこと、

という意味の四字熟語として、最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 30。

- ① 枝葉末節
- ② 同工異曲
- ③ 本末転倒
- ④ 針小棒大

問七 傍線5「胸がつぶれるような思いがした」理由として、最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。

解答番号は 31。

- ① かなり病が進行している芙巳子が、出発前に意識がおかしくなったと感じたから。
- ② 息をつめ行動していたのに、突然の芙巳子の奇声で人が来てしまうと感じたから。
- ③ 昔の芙巳子とは別人のようだと、盗み見ていたのを咎められたように思ったから。
- ④ 病状が予想より早く悪化しているのを、看護師に気づかれてしまうと思ったから。

問八 傍線6「橙色の、燃えるような太陽の切れ端が海の間こうからじりじりと見えてくる」に使われている表現として、適切で、**はないもの**を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 32。

- ① 直喩
- ② 隱喩
- ③ 擬人法
- ④ 擬態語

問九 傍線7「その光景は、自分の描いたどんな絵よりも完璧に完成しているように見えた」理由として、最も適切なものを一

つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 海と向き合う母と子の姿は感動的で美しく、絵筆で描き表わすことは出来ないと感じたから。
- ② 友人のために、決めたことを成し遂げられたという誇りと達成感で心が満たされていたから。
- ③ 友人の母の願いを叶えることができたという安堵で、緊張がほどけていくのを感じたから。
- ④ 死を前にして長いわだかまりが解けた母と娘の姿を、今はただ見守っていたいと思ったから。

問十 本文の表現の特徴として、最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 太陽が傾いていく様子で、時間の経過を表現している。
- ② 麻友美の視点から、その心情に寄り添う形で描写している。
- ③ 過去と現在が、何度も入れ替わる構造になっている。
- ④ 情景の描写が、登場人物の心情を表現する働きをしている。

《以下余白》